ウィトゲンシュタインの
テクストを手元に引き寄せる①

2023年3月1日 @東北大学自主勉強会, via Zoom

槇野沙央理（morerain19@gmail.com）

自己紹介

- 槇野 沙央理（まきの さおり）
- 所属：大正大学等非常勤講師
- 専門：ウィトゲンシュタイン
- 博論タイトル：「自己明晰化としてのウィトゲンシュタイン哲学 : 治療的解釈を超えて」
- 最近思うこと：テクスト解釈の範囲ではやりたいことができない気がしています

配布資料と文献表の案内

- 資料は、槇野のウェブサイトにて配布しています。
- 「2023年 東北大学自主勉強会 特設ページ」
- https://saorimakino.weebly.com/2648121271228232339833258200272119324375202 50.html

場の安全性について

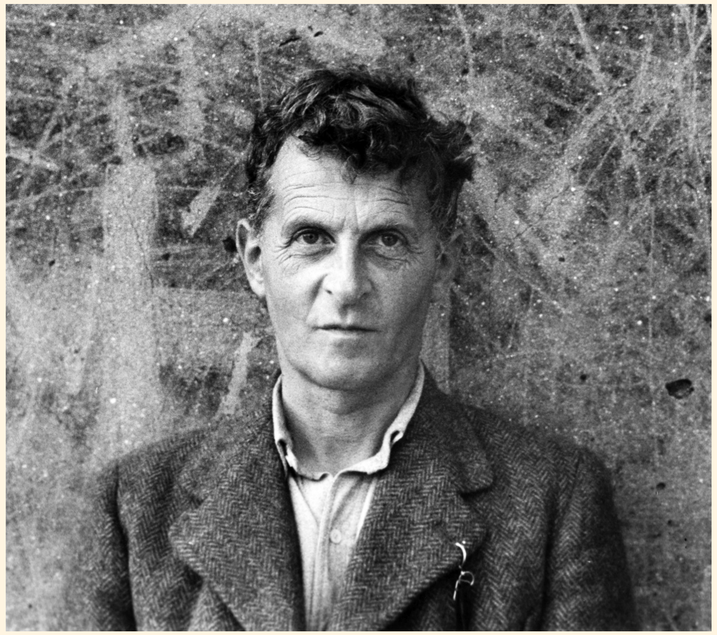
- ミスジェンダリングを避けるため、敬称は基本的に「さん」ないし「先生」を使います。
- スライドの途中（1節）で、性差別的な書籍のタイトルが一度、登場します。
- ウィトゲンシュタインはひどいミソジニストでした。そうした彼の発言を面白おかしく取り上げることに反対します。

目次

1. ウィトゲンシュタインの位置づけ
2. テクストに対する基本的な構え：読み手オリエンテッドなテクスト観
3. 自己明晰化とはどんなことか
4. 自己明晰化を支える概念形成
5. まとめ

1. ウィトゲンシュタインの位置づけ

ウィトゲンシュタインの紹介



- オーストリア出身の哲学者
- 出没年：1989-1951
- 生前の著作は『論理哲学論考』(1921)のみ
  - 『論考』は「前期ウィトゲンシュタイン哲学」の代表作と言われる
  - 死後、1953年に遺稿管理人によって出版された『哲学探究』は「後期ウィトゲンシュタイン哲学」の代表作と言われる

哲学史の中でのウィトゲンシュタイン？

- ウィトゲンシュタインは哲学史の中に位置づけにくい
- G. フレーゲ（1848-1925）やB. ラッセル（1872-1970）から強い影響を受けつつも、ウィトゲンシュタインが彼らの仕事を「引き継いだ」とはあまり言えなさそう
- 数学の本性に関する論理主義のプログラムという流れで、フレーゲ→ラッセル→ラムジーが言えるが、ウィトゲンシュタインはラムジー（1903-1930）に影響を与えたのみ（cf. 山本・黒崎 1987, p. 252）で、このプログラムには組み込めない

ウィトゲンシュタインは
どんな流れを汲んでいたか？

- 明らかに面識があったとされるG. フレーゲ（1848-1925）やB. ラッセル（1872-1970）、G. ムーア（1873-1958）以外の人からの影響については、あまり確定したことは言えない
  - アカデミックな哲学教育を受けていない
  - 亡くなったときの持ち物が非常に少なかった
- 彼がどんな人や本から影響を受けたかは、遺稿（ただし他の哲学者についての言及は非常に少ない）や、残っている手紙、会話の記録などから推測される（＝伝記的アプローチが必要）

ウィトゲンシュタインの思想的基盤

- 22歳でフレーゲやラッセルに会うまでに、思想的基盤の構築があった（cf. トゥールミン＆ジャニク 1973）
  - ウィーンの社交界における知識人たちとの交流
  - オーストリア物理学への傾倒（ここから数学や数学の基礎へ関心が広がる）

ウィトゲンシュタインへ流れ込んだ思想

- 19世紀末ウィーンの知識人たち
  - 作家、ジャーナリストのクラウス（1874-1936）、哲学者のヴァイニンガー（1880-1903、『性と性格』）、精神分析のフロイト（1856-1939、『夢判断』）
- オーストリア物理学（★ドイツのヘルツ1857-1894の影響は？（cf. 山本・黒崎 1987, pp. 233-4））
  - 物理学者のマッハ（1838-1916、チェコ→オーストリア）、物理学者のボルツマン（1844-1906）
- ほかドイツの知識人
  - ゲーテ（1749-1832、ドイツ、『色彩論』）、哲学者・歴史家のシュペングラー（1880-1936、ドイツ、『西洋の没落』）、ゲシュタルト心理学の創設者ケーラー（1887-1967、ドイツ→アメリカ）

ウィトゲンシュタイン「以降」の流れ

- ウィトゲンシュタインは何でも自己流にしてしまうので、特定の知識人の影響を強く受けていたと述べることはできても、特定の思想を「継承」したと述べることは難しい
- 他方、ウィトゲンシュタインから新しい哲学が始まったという話は比較的容易だろう
- ただし、「継承」よりも、「反発」ないし「超克」の流れの方が勢力を持った
  - 「継承」：ヴァイスマン（ウィーン学団）、ライル、アンスコム
  - 「反発」ないし「超克」：クワイン？、ダメット、デイヴィドソンなど古典的な分析哲学者たち

「継承」でも「反発」でもない人たち

- ウィトゲンシュタインからの影響は、必ずしも「継承」と「反発」には二分されない
- 同時代の哲学者でウィトゲンシュタインと対等だったのではないかと思われる人たち
  - ウィーン学団のシュリック
  - 『論考』を訳したラムジー
  - ケンブリッジでの講義に出席していたチューリング（cf. ダイアモンド 1975）

2, テクストに対する基本的な構え：
読み手オリエンテッドなテクスト観

基本スタンス
読み手オリエンテッドなテクスト（有意味）観

- ウィトゲンシュタイン研究のある文脈では、「ウィトゲンシュタインの**意図**に即して考えれば、この箇所はかくかくであるはずだ」という言い方がなされることがある
  - 文脈：ウィトゲンシュタインのテクストをもとに特定の主義・主張を構築しようとする研究者を攻撃する際の言い回し
- テクストの意味は、何らかの基準によって、固定的に・あらかじめ・決まっていると考えられる傾向にある

基本スタンス
読み手オリエンテッドなテクスト（有意味）観

- こうした傾向に抵抗するため、以下のテクスト観をとる
  - テクストの意味は、読み手という言葉を取り扱う主体が、何を・どのように被るかを**自己明晰化**することによってはじめて決まる

基本スタンス
読み手オリエンテッドなテクスト（有意味）観

- 読み手という主体を殊更に強調するとはどういうことか
- 有意味なひとまとまりの文章がある、ということを、世界の側のみで自立的に成立しているとは考えない
  - 具体的に：ある主体がどう取り扱うかということから独立に働いていると措定される言語の体系を認めない

基本スタンス
読み手オリエンテッドなテクスト（有意味）観

- 「1+1=2」や「(A→B)かつAならばB」のように、どんなに自明に思われることでも、一旦は主体の側に立ち現れる事柄として引き受けることで、方法として、どのように主体のもとで受け入れられているかを考えざるを得なくなり、自明性が留保される

- 自明性とは：分節化すなわち「語」（部分）と「文」（全体）とを得ることができ、かつ、部分の意味・使用・役割を決めることができるという考え

今日のテーマ

- ウィトゲンシュタインのテクストを取り扱う基本なスタンスである、「読み手オリエンテッドのテクスト（有意味）観」について、特に「**自己明晰化**」について、初回でお話ししておきたい
- 読み手（私）の基本なスタンスを最初に明示するのがフェアだから
- その上で、基本のスタンスを実際に運用レベルで見せることで、ウィトゲンシュタインのテクストがいかに編まれているかをも示したい

3, 自己明晰化とはどんなことか

本節でやること

- テクストを通じた読み手の「自己明晰化」とはどのようなことかについて記述する
  - ポイント：読み手の受動性と能動性

読み手の受動性と能動性

- 読み手の受動性とは
  - テクストに書いてある文字列を改変できないこと、テクストを吟味する以前にそれをいったん有意味なものとして受け入れざるを得ないこと
- 読み手の能動性とは
  - テクストから何を引き受けたかを自己に対して明晰にする（意識的となる）ことで、十全に、言葉を取り扱う主体となること

どう受動性が問題になるか？ - 慣習

- 私たちは「慣習Gepflogenheit」（PU 198, 199）において言葉を使う
  - Cf. 「慣れGewohnheit」（PU 166, 200, 508）
- 言葉は、私たちの生活に織り込まれて（cf. PU 23）おり、私たちの行動を左右している

どう受動性が問題になるか？ - 反応

- 言葉は、向こうから飛び込んでくるもの
- 私たちは、言葉が与えられる多くの場合、「解釈Deutung」（PU 198）を行うわけではない
- 私たちは端的に「反応するreagieren」（PU 185, 495）

どう受動性が問題になるか？

- 日常生活で、有意味かナンセンスかは殊更に問題とならず、むしろ、ある言葉を用いて「眼目Witz」（PU 62, 142）を果たすことができるか、ある言葉に人はどんな「反応」をするかということが問題となる

  - 例：矢印「→」、他者の痛みの表出

私たちは受動的でしかあれないのか？

- いくら言葉を用いることは「慣習」であるとはいえ、私たちが用いているのとは異なる「**使用**Gebrauch/Verwendung」（PU 23, 43）を考えることはできる

- フィクショナルな「**概念形成**」（PU2 365, 366）を行うことで、自分たちが何を被っているのかに意識的となれる

どう能動性は可能か？

- フィクショナルな「概念形成」とは
  - ウィトゲンシュタインが与えた虚構の人（々）の振る舞いに対し、私たちがどう反応するか、どんな違和感を抱くかを考えることで、結果として、私たちが言葉に対して何を読み込んでいるかが炙り出される
- ここで私たちの能動性が現れる

本節でやったこと

- 「自己明晰化」のメカニズムを「受動性」と「能動性」から記述した
  - 読み手は、言葉を「慣習」の中で用い、言葉に「反応」せざるを得ないという意味で受動的だが、フィクショナルな「概念形成」を行うことで、自分たちが何をやっているかを反省的に知ることとなり、能動性を獲得する
  - 受動的に被っていることを意識的に知ろうとするのが「自己明晰化」

4, 自己明晰化を支える概念形成

本節でやること

- フィクショナルな「概念形成」とはどのようなことか
- 【再掲】テーマ：基本のスタンス（読み手オリエンテッドなテクスト観）を実際に運用レベルで見せることで、ウィトゲンシュタインのテクストがいかに編まれているかをも示したい

概念形成について

- 前節で、フィクショナルな「概念形成」を、「ウィトゲンシュタインが与えた虚構の人（々）の振る舞い」だと述べた
- 「人」と「人々」との違いは大きい
  - 「個人」：内的感覚が生じたタイミングでカレンダーに記号Eを書き込む人（PU 258）
  - 「共同体・民族」：痛みを表出しない人々（箇所確認中）
- 我々における「個人」をフィクショナルに構成することは難しいが、共同体がまるごと異なっている場合を考えることは比較的容易（だからこそ、「個人」の想定の方が自己明晰化に役立つ）

概念形成の例：自分の指でしか数えない人

自分の指でしか数えない人。彼にとって5は片手であり、10は一人[の手]であり、そのようにして何度も指折って人々の数を数えたりする。彼にとっては十進法は任意の記数法などではないだろう。彼にとって、それは数えるための方法ではなく、数えることなのである。（LW1 212）

どんな概念形成か

- 子どものような仕方で数える（プリミティブな存在）
- アラビア数字やローマ数字を使わない（口にも出さない）
- 「**5**は片手であり、**10**は一人であり」とあるが、彼自身は数字を使わないので、この文はあくまで我々の言い方
  - 彼にとって数を数えるとは：左親指、左親指+人差し指、左親指+人差し指+中指...のように折る指の組み合わせを与えること

どんな概念形成か

- 「彼にとっては十進法は任意の記数法などではないだろう」とあるが、これも我々のやり方に偏った言い方かもしれない。
- というのも、十進法は何らかの数記号を前提とするのではないか？
  - もしそうなら、「自分の指でしか数えない人」は十進法を使っているとは言えないか？
    - 言える：「左親指、左親指+人差し指、左親指+人差し指+中指」が彼にとっての数記号だ（例えば我々の数記号に準ずる「指記号」と呼ぶ）
    - 言えない：数記号（特にアラビア数字）は個々の数に外見的な個別性があるが、指記号の方は、外見的な個別性を欠いている。3という記号の一部を捻じ曲げて4にすることはできないが、片手の中で小指だけを折ることで数を減らすことはできる。

どんな概念形成か

- 最後の「彼にとって、それ[十進法]は数えるための方法ではなく、数えることなのである」という文をどう解するか
- 我々のような数記号を持たない「彼」にとって、ものの量を測る**仕方**は決まりきっている
- 「彼」と「我々」との違いは何だろうか？

概念形成を通じた気づき

- 我々が自分たちの数記号を使わずに（数記号を使えることですでにできていることに訴えずに）、数を数えることについて考えることの難しさを見てとる

  - 自明性の留保

概念形成を通じた気づき

- 数記号を使えることですでにできていることとは、例えば、前に数えた量を、結果としてもプロセスとして保存できることだろう
- 以下の二つの列を考える
  - 結果保存：1, 2, 3, 4, 5,...
  - プロセス保存：1, 1+1, 1+1+1, 1+1+1+1,...
- 「彼」を無理やり「我々」の文化に組み込んで考える（「比較の対象」（PU 130, 131）として用いる）なら、「我々」は二つの列を使い分けられるが、「彼」は後者しかできない

概念形成を通じて何がもたらされたか

- 十進法という「方法」は、我々が現に使用している数記号のありよう（姿・形含む）と切り離して考えることはできない
- 我々は、どんな数記号を用いても、ものの量を測るということ自体（個物の切り出しとその反復）は同じだと考えがち
- しかし、概念形成してみると、私たちが数記号のありようにさまざまな前提を<u>読み込んでいる</u>ことがわかってくる
- 結果、数記号のありようが、ものの量を測る私たちの振る舞いを作っていることが理解されてくる

概念形成を通じて何がもたらされたか

- 「結果、数記号のありようが、ものの量を測る私たちの振る舞いを作っていることが理解されてくる」とは、次のことである
- 「我々は、どんな数記号を用いても、ものの量を測るということ自体（個物の切り出しとその反復）は同じだと考えがち」と述べた
- それにも関わらず、「個物の切り出しとその反復」は、数記号のありよう（姿・形）に沿って行われている、ということ
- つまり、数記号のありようによって、「個物の切り出しとその反復」の仕方も変わる

5, まとめ

本節でやること

- 本日のテーマとした、「基本のスタンスを実際に運用レベルで見せることで、ウィトゲンシュタインのテクストがいかに編まれているかをも示したい」ということを、どう遂行したか

三つの射程

- 今日のテーマは、次の三つの射程を持つ
  - ①読み手の基本なスタンスの明示化がしたい
  - ②読み手の基本なスタンスを明示化するため、読み手という主体が、ウィトゲンシュタインのテクストから何を・どのように被るかの**自己明晰化**をしたい
  - ③上記の**自己明晰化**が、実質的に、ウィトゲンシュタインのテクスト編成について語ることになる、ということを示したい

三つの射程同士の関係

- ①読み手の基本なスタンスの明示化がしたい
- ②読み手の基本なスタンスを明示化するため、読み手という主体が、ウィトゲンシュタインのテクストから何を・どのように被るかの自己明晰化をしたい
- **上記二つについては、ある程度見てとってもらえたのではないか**

三つの射程同士の関係

- ②読み手の基本なスタンスを明示化するため、読み手という主体が、ウィトゲンシュタインのテクストから何を・どのように被るかの自己明晰化をしたい
- ③上記の自己明晰化が、実質的に、ウィトゲンシュタインのテクスト編成について語ることになる、ということを示したい
- **③に関しては、まだ明示的に述べていない**

まとめ

- 本日のテーマとした、「基本のスタンスを実際に運用レベルで見せることで、ウィトゲンシュタインのテクストがいかに編まれているかをも示したい」ということを、どう遂行したか
  - 『探究』は、自己明晰化を行うために都合のよい素材を与える（＝概念形成を行う）よう編まれている
  - なぜこう述べるかというと、このように考えることで『探究』が魅力的に読め、なおかつ、ウィトゲンシュタインの意図に言及することなく、私たちの使い勝手から『探究』のありようを判断できるから

ご清聴ありがとうございました